

文久元年閏年十一月十一日

那休泊剌御膳書込

仁孝天皇皇女
和宮様

御旅帳

企画展

幕末本庄宿の おもてなし

～和宮宿泊の舞台裏～



展 示 解 説

パンフレット



御年拾六歳
上様仁御患入シ遊に

献上桃糸仁
仁白及三方に
戴奉書込

1

中山道本庄宿と田村本陣



本庄宿の概要

天正 18 年（1590）、豊臣秀吉^{とよとみひでよし}によって小田原北条氏が滅ぼされ徳川家康^{とくがわいえやす}が関東に入国しました。そして、慶長 5 年（1600）、家康が関ヶ原の戦いに勝利すると、江戸と各地を結ぶ街道の整備が本格的に行われるようになりました。

天正 18 年、家康家臣の小笠原信嶺^{おがさわらのぶみね}が 1 万石で本庄城に配置され、城下町の開発が始まりました。中世末期には宿場の基礎が形成されたとも言われており、初期の本庄宿には「上宿（上町）」・「中宿（中町）」・「本宿（本町）」の 3 つの町が造られました。そして、詳しい過程は定かではないものの、信嶺の養子である小笠原信之^{のぶゆき}が城主であった慶長 3 年（1598）から同 17 年（1612）の間に宿場が本格的に形成されました。慶長 7 年（1602）頃には、のちに宿役人を勤める新田家家臣の末裔集団「花ノ木十八軒」が本宿辺りに移り住んだとされています。

本庄宿は、街道による人々の往来、水運の要である山王堂河岸や一本木河岸^{さんとうがし いっぽんぎがし}、多くの商人などの要因から中山道で最も栄えた宿場だったといわれています。具体的な数字を挙げると、天保 14 年（1843）の『中山道宿村大概帳』によれば家数 1,212 軒・人口 4,554 人（男 2,264 人・女 2,290 人）であり、当時の中山道において家数と人口において最大の宿場でした。

中山道絵図 本庄宿

文久元年（1861）／本庄市蔵



道を赤色、川を青色で表した略図。宿場の東西の入り口に木戸が設けられていたことが読み取れる。また、図中には傍示^{ぼうじ}杭（領地の境界に立てられた標柱）らしきものや寺院も画かれている。

2

大名を迎えた田村本陣

本陣とは、宿場において大名や幕府役人などが休憩や宿泊の際に使用した施設です。本庄宿には2つの本陣が存在しており、それぞれ田村家と内田家によって経営されていました。なお、本庄宿は、寛永14年(1637)に人馬継立場じんばつぎたてばとなりました。

また、本庄宿の本陣は、加賀前田家かがまえだが上野国川井河岸こうずけのくにかわいがし(群馬県玉村町)に設けた本陣を起源とし、同家によって本庄宿へ移されたものと伝えられています。田村家が本陣経営を開始したのもこの頃であると考えられます。その後、寛政4年(1792)に内田家が本陣に昇格し、田村本陣は「北本陣」、内田本陣は「南本陣」と呼ばれるようになりました。

本陣では、大名等の休憩や宿泊を『休泊控帳』に記録し次代へ受け継いできました。本庄宿においては、田村家が寛永19年(1642)から文久3年(1863)までの223年間を記録した『休泊控帳』が現存しています。記述内容は、休泊日・大名の名前・人数・献上品・下賜金・食事内容・料理人や番所の有無・使用した道具や馬の餌代など多岐にわたり、本陣を利用した大名や幕府役人などの滞在時の様子や本陣側の対応が読み取れます。

田村本陣の門

(本庄市指定有形文化財)



現在は、田村本陣が置かれていた場所から旧本庄警察署前へ移されている。右図は、『中山道分間延絵図』中の田村本陣(東京国立博物館研究情報アーカイブより)。

田村本陣休泊控帳

田村家文書(一部)



左から

- ①寛永19年～
正徳2年(1712)
- ②嘉永3年(1850)
～安政2年(1855)
- ③文政4年(1821)
～文政11年(1828)

のもの。

松大鷹図

江戸時代後期 / (本庄市蔵)



田村本陣の当主であった田村作兵衛(英甫)^{えいほ}の作品である。英甫は狩野派の画法を習得したと伝えられており、画題も同派でよく描かれるものである。

2

姫君の通行と本庄宿



1 輿入れにとまなう姫君の通行

3代将軍徳川家光^{いえみつ}以降、将軍の正室は京都に住まう摂家^{せつけ}や宮家^{みやけ}、皇女から迎えることになっていました。当時、京都と江戸を結ぶ街道には、東海道と中山道がありましたが、姫君^{げこう}の下向においては主に中山道が用いられました。これは、東海道には大きな河川が多く、天候によっては日程が大きく遅れる可能性があるのに対し、中山道は道が険しいものの河川が少ないため比較的予定通りに到着できるという利点があるためでした。

和宮^{かずのみや}以外にも本庄宿の史料に記述が残る姫君が存在します。享保16年(1731)の比宮^{なみのみや}、寛延2年(1749)の五十宮^{いそのみや}、文化元年(1804)の楽宮^{さざのみや}、天保2年(1831)の有君^{ありぎみ}、嘉永2年(1849)の寿明君^{すめぎみ}の5名です。

本庄宿を利用した姫君

和暦(西暦)	姫君の名前	輿入れ先	本庄宿での休泊
享保16年(1731)	比宮(伏見宮邦永親王王女)	9代 徳川家重	田村本陣 小休
寛延2年(1749)	五十宮(閑院宮直仁親王王女)	10代 徳川家治	田村本陣 小休
文化元年(1804)	楽宮(有栖川宮織仁親王王女)	12代 徳川家慶	内田本陣 昼休
天保2年(1831)	有君(鷹司政通養女)	13代 徳川家定	田村本陣 宿泊
嘉永2年(1849)	寿明君(一条忠良女)	13代 徳川家定	田村本陣 昼休

比宮の通行

『田村本陣休泊控帳』享保16年5月5日

比宮の通行に際して行われた本庄宿内の道の普請について記されている。前日には、前泊地である板鼻宿^{いたはな}(群馬県安中市)まで田村本陣の者が「御機嫌伺^{ごきげんうかがい}」に赴いていたことがわかる。



五十宮の通行

『田村本陣休泊控帳』寛延2年3月17日

五十宮の輿入れでは、本庄宿で小休を取った。これに際し、雪隠^{せっちん}や井戸の雨覆いなどが新調された。前日には当主が迎えに赴いたほか、本陣到着の際にも袴を着用して門前で出迎えたようである。





有君の通行と本陣の対応

有君（文政6年（1823）～嘉永元年（1848））は、8歳で13代将軍徳川家定^{いえさだ}へ輿入れし、18歳で婚儀が行われました。

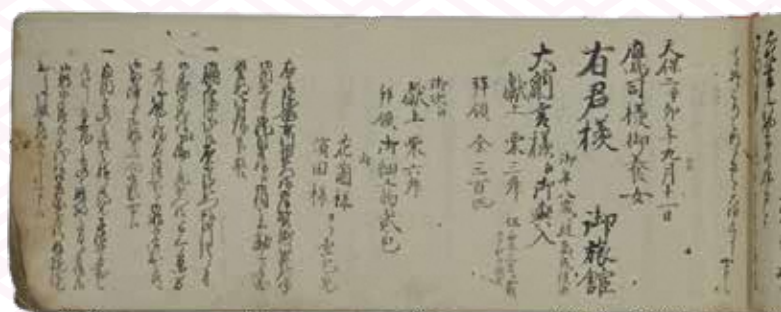
有君の下向に際して本庄宿の田村本陣に宿泊するにあたり、田村家から幕府へ事前に絵図面が提出されました。そして、天保2年（1831）6月末より幕府からの指示による御湯殿などの建築が始まりました。同年8月には幕府役人による検分が立て続けに行われ、混雑した状況が続いたため、『休泊控帳』の当時の記述には詳しく記録に書き留める間もなかったと記されています。

宿泊前日には御湯殿などの検分が行われました。その際、天井裏も検分されたほか、上段之間や裏通りなどは幕府の御庭番（将軍直轄の隠密）が確認しました。また、有君を迎えるにあたり田村家当主や本陣に出入りする者は袴^{かみしも}を着用し、田村家の者は代官所手代や伊賀者^{いがもの}の指示を受けるため御膳のしまってある部屋へ詰めていました。

有君は、天保2年9月11日に本庄宿へ到着しました。有君の一行の人数は4,500人余り、馬は1,000頭にものぼり、一行を継立する助郷人馬は前日に宿場に集まり、宿内の寺院と台町の民家に宿泊したとされています。また、有君一行が本庄宿を出立し家定への輿入れも済んだ天保3年3月、田村家当主は江戸へ呼び出されます。この時、必要経費を除いた金額が礼金として渡されたほか、今回新規で建造した建物や道具類が本陣に下げ渡されました。

有君の通行

『田村本陣休泊控帳』天保2年9月11日



鷹司政通の養女・有君の下向の際、

本庄宿及び田村本陣を利用するにあたっての事前準備や幕府による検分の様子、本陣の対応が詳細に記されている。なお、輿入れ時の有君は9歳であり、婚礼は天保13年（1842）に行われた。その後、嘉永元年（1848）に26歳で死去した。

御下向之図

江戸時代後期 / 群馬県立歴史博物館所蔵・同館より写真提供

有君の降嫁の様子を描いた絵巻。現在の埼玉県にあたる地域では、本庄宿・深谷宿・熊谷宿・上尾宿・戸田川が描かれている。絵巻中で有君の姿は直接描かれずに朱傘で表現されている。

本庄宿御泊



本庄宿の建物の一部と妙義山が描かれている。建物は、田村本陣または内田本陣の門を描いたものと考えられる。

深谷宿御昼休



深谷宿本陣の門が描かれている。大名が本陣に到着した場面であり、門の前に盛砂が設けられている。

江戸御着



有君が江戸に到着した場面であり、霞越しに江戸城の平川門が描かれている。

3

和宮の降嫁と本庄宿



1 和宮降嫁へ至る政治情勢

孝明天皇こうめいてんのうの妹である和宮（弘化3年（1846）～明治10年（1877））の降嫁には、諸外国への対応や尊王攘夷そんのうじょういが叫ばれる中での「公武合体（朝廷と幕府が協力し難事へ対応する）」政策の象徴という政治的目的がありました。

和宮を14代将軍徳川家茂いえもちの正室に迎える計画は、井伊直弼いいなおすけによる構想があったとされています。しかしながら、安政7年（1860）3月3日に桜田門外の変によって井伊が暗殺されたため、新たに老中に就任した安藤信正あんどうのぶまさと久世広周くぜひろちかによって万延元年（1860）4月1日付で朝廷へ和宮降嫁が奏請そうせいされました。これを受けた孝明天皇は、和宮がすでに有栖川宮熾仁親王ありすがわのみやたるひとしんのうと婚約していることを理由に拒否しました。

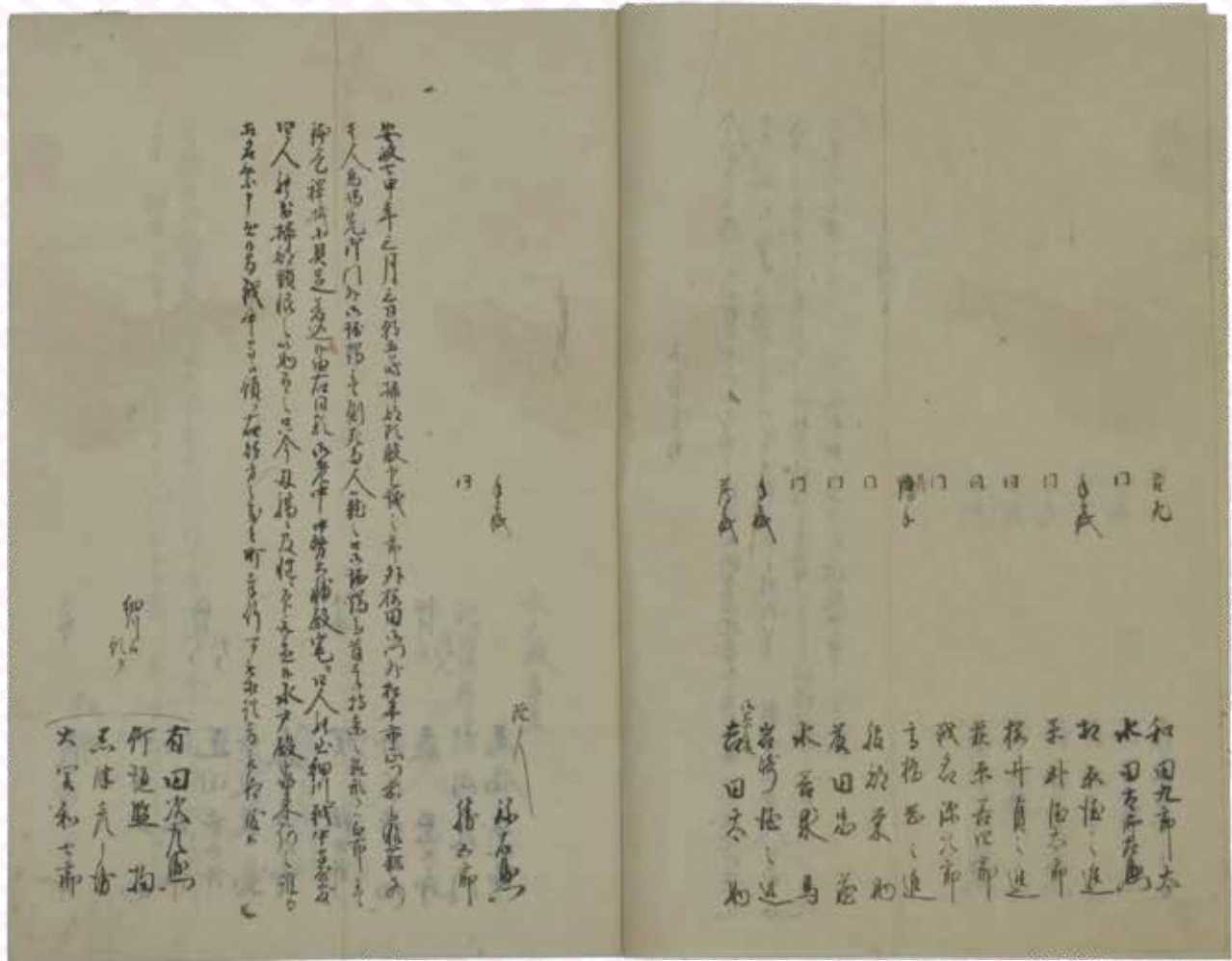
一度拒否されたものの幕府は再度奏請をし、万延元年6月、日米修好通商条約にちべいしゅうこうつうしょうじょうやくをはじめとする各国との開港条約の10年以内の破棄を条件に和宮降嫁の内諾を得ました。この後も幕府と朝廷、和宮の間で様々な条件の調整が行われた結果、万延元年10月18日に孝明天皇によって和宮降嫁が勅許されました。

和宮肖像

国立国会図書館「近代日本人の肖像」より



弘化3年（1846）～明治10年（1877）。仁孝天皇第8皇女。嘉永4年（1851）に有栖川宮熾仁親王と婚約するが、公武合体の象徴として文久2年（1862）に徳川家茂のもとへ降嫁。降嫁に際し、その決意を「惜しまじな 君と民とのためなれば 身は武蔵野の 露と消ゆとも」と和歌に残している。家茂との関係は良好であったとされ、家茂が死去すると薙髪ちはつ（頭髪を剃ること）し、静寛院せいかんいんと称した。明治元年（1868）1月の鳥羽伏見の戦いの後、朝廷へ徳川家存続のための懇願なども行った。明治維新後は上洛し京都に滞在するが、明治7年（1874）に東京へ戻った。



安政の大獄などの強権的な政治を行った大老の井伊直弼が安政7年（1860）3月3日に水戸浪士らによって暗殺された桜田門外の変について、事件の様子を伝える風聞集。庶民の間でも関心の高い事件であったことがうかがえる資料である。



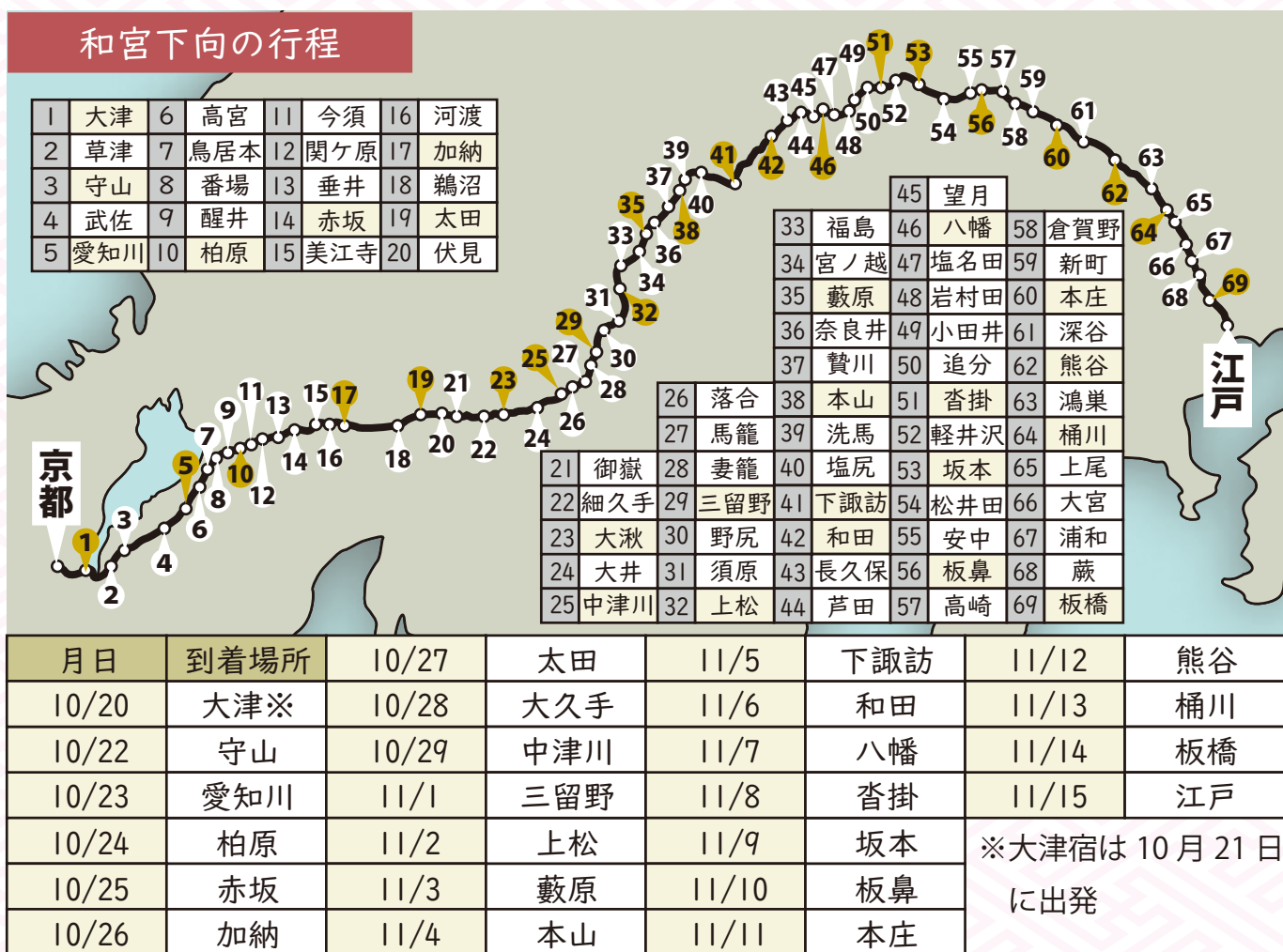
皇女和宮の降嫁

文久元年（1861）、和宮は徳川家茂との婚姻のため、江戸に向けて下向しました。本来は東海道を通行する予定でしたが、尊王攘夷運動の高まりにより世情が不安定であったことから中山道が選ばれました。

文久元年 10 月 20 日に京都を発した和宮は、武蔵国に入った同年 11 月 11 日に本庄宿田村本陣に宿泊しました。また、和宮が江戸へ下向する道中の警護は、沿道を治める大名が受け持つ取決めとなっており、本庄宿から^{わらび}蕨宿までの間は岡部^{あんべ}藩安部氏が担当しました。警護の人数を含めると、和宮降嫁の行列は、約 1 万人にも上ったとされています。

中山道全行程 136 里（約 544 km）を一日平均 5.7 里（約 23 km）の速さで進んだ和宮一行は、同年 11 月 15 日に江戸へ到着しました。そして、文久 2 年（1862）2 月 11 日に家茂との婚儀が挙行されたのです。

なお、当時江戸や大坂などで和宮降嫁に関する多くの瓦版が作成されていることから、この出来事に対して庶民の間にも強い関心があったと考えられます。





『御用留』に見る本陣の対応

田村本陣では、和宮の宿泊に向けた入念な準備が行われ、その様子が御用留ごようどめに記録されています。以下ではその内容をご紹介します。

文久元年4月、田村本陣の図面が幕府へ提出され、幕府による本陣の検分が行われました。この時、御膳水ごぜんすいや非常時の御立退場おたちのきば（逃げ道）も確認を受けました。なお御立退場は、御用留内の図から田村本陣の裏門から開善寺と円心寺へつながる道が確保されていたことがわかります。また、本陣から幕府への提出物の中には、過去の姫君の通行記録である『往古より御下向御休泊由緒』もありました。

7月には和宮が通行する往還の検分が行われました。8月には「御下向御用」として幕府関係者が本陣へ泊るようになったほか、28日からは本陣建物の普請や修繕が始まりました。この普請は9月に幕府によって検分され、追加普請の指示もありました。なお、10月になっても建物の敷居や鴨居などの新調の指示を受けるなど、前代未聞の事態への対応に本陣側も苦労していた様子が垣間見えます。

「御迎御用」のための準備

『和宮様御下向御用留』より作成

- | | |
|------------|--|
| 3月 | <u>28日</u> 奉行所より本庄宿とその主要施設の平面図提出の触書が届く。 |
| 4月 | <u>4日</u> 奉行所へ平面図を提出。
<u>12~13日</u> 御徒目付による両本陣の検分を実施。姫君下向の記録を提出。 |
| 7月 | <u>26日</u> 「往還道橋検分」の実施。 |
| 8月 | <u>19日</u> 皇女和宮が田村本陣へ宿泊する旨の通知が届く。
<u>21日</u> 幕府や支配代官所の役人による利根川・荒川の渡船場の見張番所設置場所の検分を実施。
<u>23日</u> 宿場検分にともない御徒目付や「御伊賀者」が田村本陣などに宿泊。
<u>27日</u> 幕府普請役より本陣の普請箇所について通達。28日より普請開始。 |
| 9月 | <u>13日</u> 幕府普請役による検分を受ける。8月28日から9月13日にかけて、上段の間・二の間・三の間の畳の張替や根太（床板の下地にあたる構造部材）の取替を行うが、追加の普請指示や催促を受ける。
<u>14日</u> 御湯殿の普請や高札場の移築について指示を受ける。
<u>24日</u> 御立退道の検分実施。当日の宿役人の役割分担が決定。
<u>27日</u> 御用所・御湯殿が棟上げとなる。 |
| 10月 | <u>7日</u> 見た目のみ繕うよう指示されていた上段の間の柱や敷居、鴨居について取替指示を受ける
<u>9日</u> 15日までに完成との指示のもと、上段の間の普請開始。 |

立退場絵図（文久元年4月13日）



文久元年4月、幕府役人による^{おたちのきば}御立退場（逃げ道）の検分で用いられた資料の控え。本陣の裏門から開善寺と円心寺に逃げるよう設定しており、嘉永2年の寿明君の休憩でも同様の御立退場であったことを報告している。その際、本陣の井戸水を「御膳水」として和宮に出す旨も申し出ている。

本陣の普請開始（文久元年8月28日）



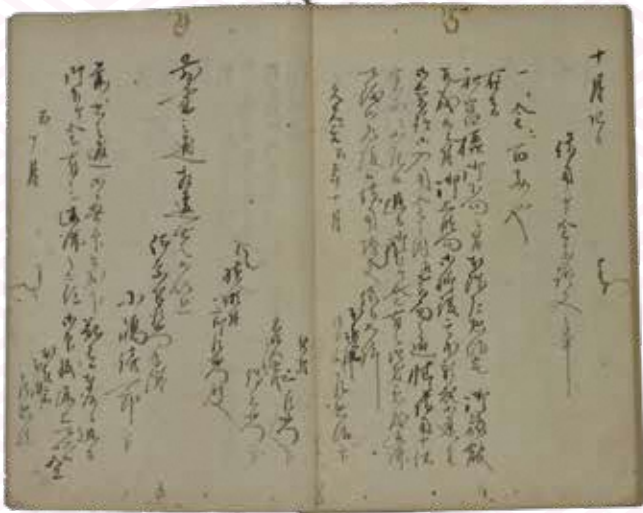
8月28日から開始した田村本陣の増築及び修繕に関する当日の記録。作業中は『御普請中無用之者入るべからず』と書かれた札が表門に掛けられたほか、本陣内で作業に従事する職人用の腰札（鑑札）も用意されていたことが記されている。

御用提灯・御用旗の図（文久元年9月11日）



和宮が宿泊する田村本陣での建物の建造や修復などの作業の際に使用を許可された御用提灯と御用旗の図。御用提灯と御用旗には、それぞれ「御下向御用」、「御下向御用 本庄宿御本陣掛」と書かれている。

金子の借用（文久元年9月14日）



和宮下向に際して行われた普請ための費用借用に関する証文の写し。普請のために幕府から下げ渡された下付金だけでは賄うことができず、宿内や周辺の有力者から金子を借りて対応していたことがうかがえる。

御本陣御取立建物出来形帳

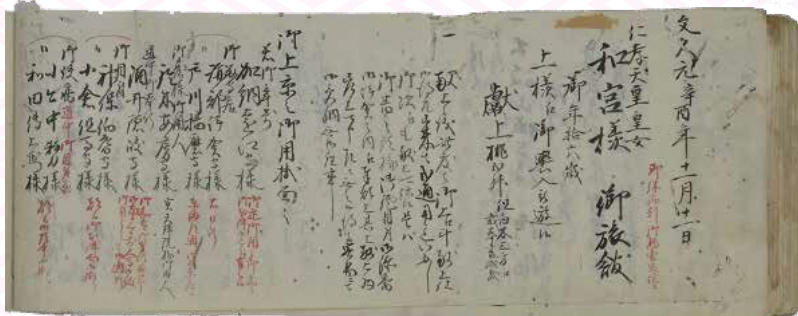
文久2年 / 田村家文書



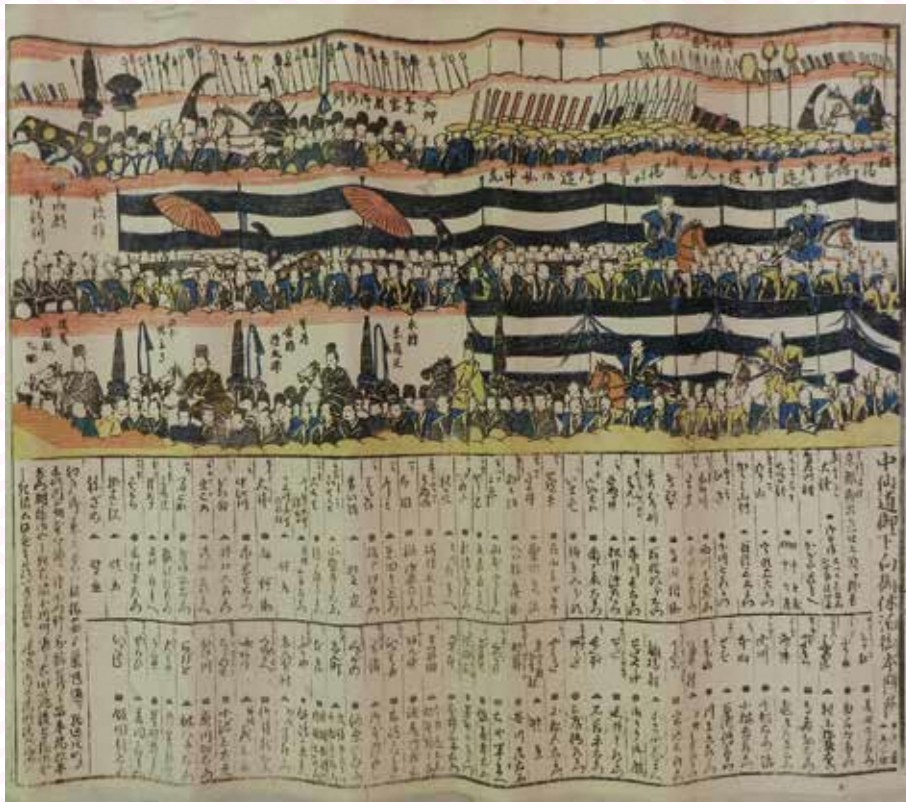
和宮の下向に際して新築・修理された建物の仕上がり具合を書き上げたもの。湯殿や雪隠などをはじめ、本陣の様々な施設が建て替えられたことが記されている。

和宮の宿泊記録

『田村本陣休泊控帳』文久元年11月11日



和宮の宿泊に際しての本陣側の対応や下向に関わった幕府役人、随行した公家、陰陽師が記録されている。随行者の中には、和宮の母・観行院かんぎょういんの名前もある。なお、本陣では大名の宿泊の際、献上品を用意するのが通例であったが、和宮の宿泊の際は、田村本陣から桃を献上したと記されている。



和宮の下向に同行した公家や武家、利用した本陣とその当主を記した刷り物。和宮の行列が多色刷りの版画で表現されている。このような刷り物は様々な版元から出版されており、和宮の輿入れが庶民にとっても大きな関心事であったことがうかがえる。



4

当日の動向

11 月 11 日、本庄宿へ到着した和宮は、田村本陣で一泊し、翌日には次の宿泊予定地であった熊谷宿へ向けて出発しました。しかしながら、和宮一行はあまりの人数の多さから一日では本庄宿を通過することが出来ず、和宮宿泊の前日や翌日にも行列の一部が本庄宿で宿泊したようです。また和宮一行の中には、公家のほかにも和宮の母親の観行院や陰陽師も同行していたと記録されています。

本庄宿での和宮の動向は、残念ながら文書として残されておりません。一方で、宿場に滞在中の和宮の動向の一部を示す資料として、和宮から下賜された料紙箱や人形、草履などが伝わる宿場も存在します。本庄宿にも観行院が下賜した人形や扇子などの品々が伝わっており、和宮からも所縁の品の下賜があったのではと推測されます。

『休泊控帳』にも和宮の動向は記されていないものの、「御上京之御用係」の任にあたった幕府の若年寄や道中奉行、京都町奉行といった面々や本庄宿の支配代官である伊奈半左衛門などの多くの関係者の名前が列記されています。また、田村本陣から和宮へ奉書紙を敷いた白木の三方に桃を置いて献上したと記されています。

和宮様御下向御通輿中入用払帳

文久3年(1863) / 市有文書

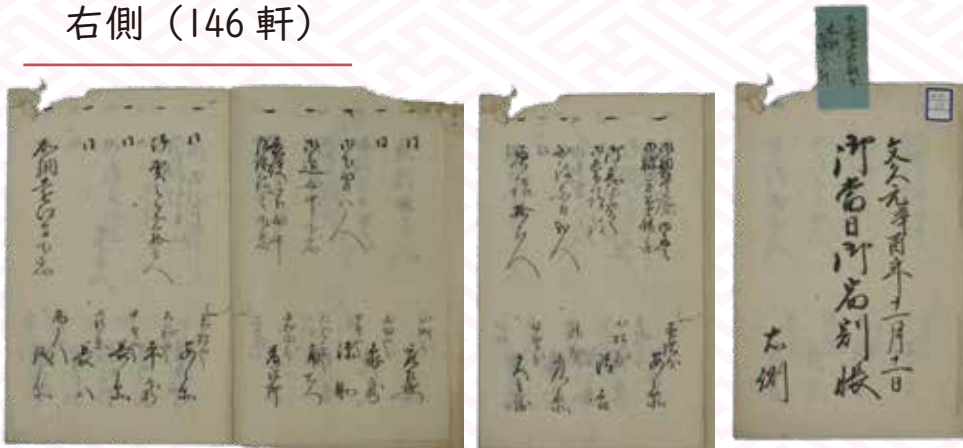


和宮下向の際に掛かった本庄宿内の経費を宿役人・森田助左衛門がまとめた帳簿。代官の伊那半左衛門役所へ提出された。当初は金 642 両余りが幕府から下付されたものの、準備を進めるなかで金 1245 両ほど不足が生じたため、村入用や往還入用の金銭で補填したことが記されている。

左側 (151 軒)

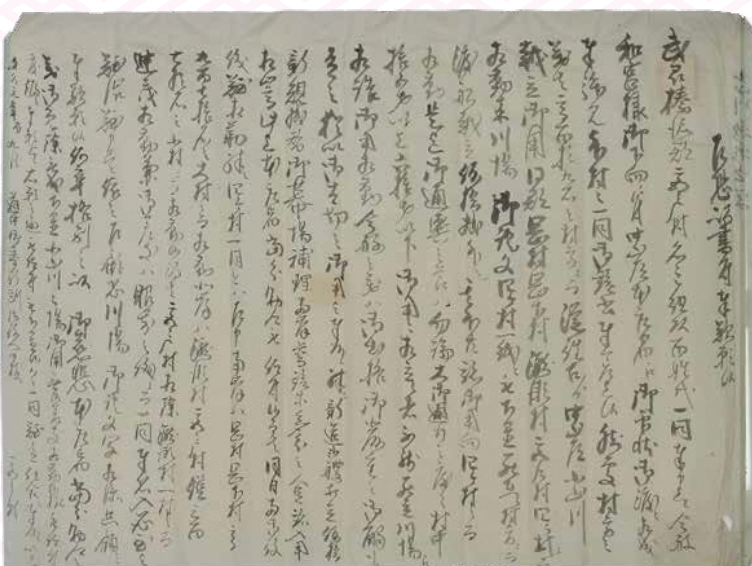


右側 (146 軒)

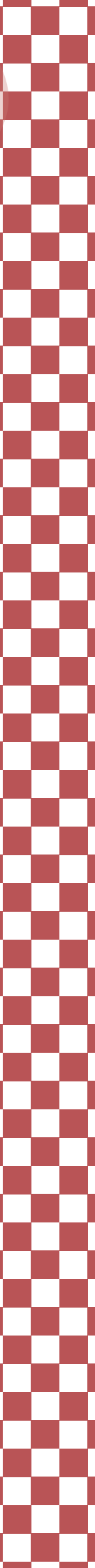
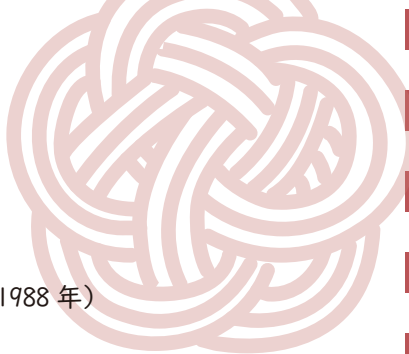


文久元年11月11日に和宮が本庄宿に宿泊した際の関係者の宿割。中山道を挟んで宿場を左右に分けてまとめている。下向の随行人があまりにも多いため旅籠だけでは賄いきれず、宿内の寺院や商店までも宿泊先に割り当てられている。なお、公家は宿役人宅や旅籠、幕府役人は寺院等を宛てがわれており、所属や地位によって宿泊先が割り振られていたことがうかがえる。

和宮下向における助郷免除願い



岡村、岡下村、滝瀬村、宮戸村から幕府へ提出された助郷免除の嘆願書の控え。これらの4カ村は小山川の渡しの人足を勤めており、今回の和宮下向では新規に船や仮橋を造るなど入念な準備が必要であった。そのため、和宮下向時の助郷を免除してもらえよう願い出た。



【参考文献】

- ・柴崎起三雄「英甫 田村本陣作兵衛事」(『本庄市史拾遺』第22号、1988年)
- ・埼玉県『新編埼玉県史 通史編4』(1989年)
- ・本庄市史編集室『本庄市史 通史編Ⅱ』(1989年)
- ・江戸東京博物館『皇女和宮—幕末の朝廷と幕府—』(1997年)
- ・『街道開設四百年記念 中山道展』(2002年)
- ・長谷川勇編『中山道本庄宿 田村本陣休泊控帳』(さきたま出版会、2007年)
- ・埼玉県立歴史と民俗の博物館『皇女和宮と中山道』(平成23年)
- ・青山忠正『日本近世の歴史6 明治維新』(吉川弘文館、2012年)
- ・土浦市立博物館・日野市立新選組のふるさと歴史館・壬生町立歴史民俗資料館・板橋区立郷土資料館『幕末動乱—開国から攘夷へ—』(2014年)
- ・江戸東京博物館『徳川将軍家の婚礼』(2017年)
- ・宮地正人『幕末維新変革史(上)(下)』(岩波現代文庫、2018年)
- ・江戸東京博物館『江戸の街道をゆく～将軍と姫君の旅路～』(2019年)
- ・加藤勝一「【史料紹介】 和宮下向と田島村—朝霞市内の助郷史料—」(『朝霞市博物館研究紀要』第18号、2022年)

【展示協力機関】

本展覧会の開催にあたり、以下の機関・方々にお世話になりました。

記して感謝申し上げます。(敬称略)

・群馬県立歴史博物館 江原幸太郎 ・埼玉県立文書館 森田順子

※本リーフレットは、企画展「幕末本庄宿のおもてなし～和宮宿泊の舞台裏～」(会期：令和6年1月19日～3月25日、会場：旧本庄商業銀行煉瓦倉庫)の開催に合わせて作成した。執筆は松浦誠・秋山寛行(共に文化財保護課職員)が行った。



『幕末本庄宿のおもてなし～和宮宿泊の舞台裏～』

編集 本庄市教育委員会文化財保護課

発行日 令和6(2024)1月19日

本庄早稲田の杜ミュージアム